新板
繪入

御伽名題紙数

一

遠13
16.7.23

特へ
1673
1

饗庭文庫

序

正夫の番賢菩薩小もせよ江口の妓女、
ゑき男子共乃為ニ仇なる遊君乃
戯まて氏始皇しよりこの来諸国其所々の
花女うかさ純身艶を潰し招く邪徒よ
あ人ほ人乃の数沼ふ命く六の道ゑみ
長ず親兄弟れ乃ゑ少さ其身も流浪を
勢ゑを物ま仏狂言畫よ移して人を伝ひ
狂言なぐよ記識ぢうこの遊びう

よいかぐいを稽古けまい深へでわが輝成べ
思慮ぐ〜情むべきい此世奥世乃血氣なる
若人れ異見の稽ふ上ま仮者の物言せ〜
名誉乃男ど成集ゆく親文達れ教訓の
見代とまれものなら〜

元文三戊午年　作者　真磧

正月吉日

沸伽名題紙衣　目録　一之巻

第一　祝い石の息子い紙し包まて和ふ音
仕合い書て来る意私様と社為代の動奉
三味線に書て来る太鼓い祝乃罰わら
手本の花ふ場る吉野い色豊れ大実職

第二　大実を見初く合紙割る小刀祝治
腐好び合の洗濯布子糊の強い親方の新
ひらや炭付る意風こぐく脳乃ふいご系
大実に新巴衣被乃罰利まある情乃掛引

第三　勤商をしゝて意思公見遠慮を以て全
　　世の元を根ふかくする事の第一
　　親乃時でさへ立さ男子が全れ光り
　　ゆゑ乃ゝ子もさへ待さ親乃勤商

第四　垣紙踏ぐく本知ふ立ゆる古の綿
　　業問屋も施の営動に身代乃下り口
　　縁ゝひろく三味線のごとゝいさ仕方が遊
　　玉紙好ゝ方後の智恵い深い親乃ゝ恵

一　親い乃親長ゝい綿に包まゝて育ゝか育
　　想て初ゝいゝ乃ゝ子なき。分限者の人種も。差し出ゝ出ゝ裸ゝ仕ども。
　　それゝの家業に応じて。費ゝ掛ゝる仕合を。ちゝび始末を第一に
　　して年ゝゆゝ掛ゝ。持ゝ乃長ゝ繁ゝ物ゝ乃ゝ。ぜゝ仕ゝ乃ゝ仕合
　　といゝ行ゝ様ゝ面ゝく。れ智恵出ゝ出ゝ笑ゝといゝく指ゝ出ゝ。家業乃事
　　でゝ。ざゝれゝば若ゝ乃長ゝ二代ゝ乃ゝ。ゝとゝいゝひゝつゝ乃ゝ。ゝ一代ゝ乃ゝ。ゝ
　　ゝず。ゝ親ゝい後ゝ乃ゝ。ゝ乃ゝ仕ゝ方ゝ。ゝ仕ゝ。ゝ。ゝ。

今紙の新かうて。無ときらめりていまくに金をけいや〜先ついて又の志と
ゆづりてこうふろ紙をしいて。ふ巻の罪をもて。残いて先祖。子孫栄久
のあかの所に長行ねをしいて。祝月てるの栄耀ふついて先ふ。大きな罪
人出べ〜ぬのき金ふて。又新をにゆづりわてるいて先祖の名のかりわと又
先祖へ久をとろ和をろ。ふるふ色をひいて引代を洗しおを掃ひあと
立返。ふつるのてしてめて先祖の主人を思と帰ひめてし追善をする新。
さ〜く新てのけ長法をいにふいはづ。商人の家業のるけつて。仕合
けて大分の商和と新よ換大ふて。ふ祝新〜。ふひようふ換ど〜ふい新け
紙ふ掃。扇換式い常ふ和のりと後あじて大きふ換をてつぶるい。
商人の習ひ。ふ長ふ家のつぶれいてのるけば先祖の名長も。ふて家名
みづ〜。番頭みても。一代二代い続くべき祝の今紙を。柱安所へけろひ換て。
家とつぶとものい又逆罪のふ考ものといひつべ〜けろ〜せるろ。

和とろるい新の所立いふいはろ勇よ紙のわとわてど。ほふい法茶ろ
鼻よ木の香も熟ど。祥月十分新ろいかく。掃溜の茶屑をも拾ひて
後ざい極へ寿茶後をつなぎさあ。京へも歩行でのぐろ情の祝合牧方
の出ろ子しの一里塚れ。れの下を宿して。天の川ひよりて吞。茶の銭一文
つろど。拾ひ茶粧して。ふの考よ左高ひのろと同紙よ。そふい土端ど。こと
牧肩の於名ふい。出商図を茶いろふ。ふ結など。盆紙のきろ
丑服初の前ろをつぶ。煙梅ど。ふて。男人よ夷神とあ。世の中に
紙てと。業平の後れ。楽も。今に性ねろと。ふ家名かつろ和紙の新
して。ふ新打て。ゆえ〜い左拾ぶ。蛭の古ろろるどと。ふ左てふ
老と。中。毋はやの井角ろ人ふ名をおていろ。ひ茂新。のるい。汚
京のつさあ〜世ふい井角ろいて古まが出ぶ。新所の井角ふを庫和
ぐらぶ汚ふ。ふ月ど名と行ど。ゆ茂ふ。ふ名ろ。ふぐろ。ふぐく

のぐるとなるとて高麗のゆうにいそで金蒔ふのぐるかぐ紙の羅金の異か
みつつさきふかぬぞとピ人のぶ〜ていポーよ情じべさい如即利ひなり。
昔日三代いちの大嵐三名ぴ吉ゆ力ま拘ぶ仕て伊茂ふ大まくや利
三大くゆりて人ぴ人ま人ま人ま

一角て
ゑろ
赤社
ゆたん
う一世
乃中の
おろかなる
男ぶり
かぐらやにたて
うれをうろ
うろ

源易
いるうん
そふる
ゆたんてゆろ
うれ
ちま
ほけ
そのどく
かろ

足ぞいの一本松の一本松とよばれて。俗の人、影絵ぞろえして中方に住人
あり。絶世にて独立ち。一度顧まば人の城を傾け。再び顧れば人の国を
傾くと。傾城。まま人の粧ひもくやめん。松よ。淮南子に云ふ。名を学ぶ
ものは。ひとりにて。いる。新つきすれども。ちのき。名もなしにも名をたけど
みさけ。かるをふかるよりも。ないるとは。拾る。女。おもひ。れ
るに。ひとり。そのわつ。ぞ。ぞ。生をもえたもとれ。ふと。ゆ。方。ふれば。
雲に。蔦屋よ。ゆけば。先生。る。芭蕉。すた。ぞ。ふ。る。ゆ。大
に。奥。屋。と。ひて。行。ひ。り。ぞ。ふ。ふ。て。ぞ。ぞ。ぞ

あつてくるまを二人ぶ[illegible]ぶ[illegible]ぶ[illegible]の[illegible]盛物[illegible]ある事[illegible]と一あんとうれ
さ。国方の[illegible]仕[illegible]つれ[illegible]。利[illegible]ぬ山[illegible]ぶ[illegible]。宇[illegible]ぬ[illegible]と大[illegible]入させて[illegible]
男の[illegible]おちくるれ[illegible]ぶ[illegible]けの[illegible]ぬ[illegible]の[illegible]。[illegible]て[illegible]。[illegible]わりの[illegible]
て[illegible]ぶ[illegible]ゆる[illegible]。[illegible]てさつぶ[illegible]ぶ[illegible]ぶ[illegible]ぶ[illegible]ぶ[illegible]ぶ[illegible]ぶ[illegible]ぶ[illegible]ぶ[illegible]
ぶ[illegible]ぶ[illegible]ぶ[illegible]ぶ[illegible]ぶ[illegible]ぶ[illegible]ぶ[illegible]ぶ[illegible]

のつて吸ふてくれくいふひとんこぶしのうへに貝い肝をげて食はとつひ亭者ぬしがふ忘れて出のこ口入るくこまもさいくゆて公ざは初りぐづのしゆけ吸ぬいくいてうれる事のこ吸て。

つるはさ毎こ宿彩の荷物の本指ぬいて部ぐ蝶とうでつけてやうぐ。男自傷の美音さんぐぬ入ぬひんつうとこふまるの上るうのうてかこうぐ名ぐいうつねうこ初手いにてやそくのうぐいゆれぐいれうの。けていうてうまぐのげやゆうとあぐのけるふぐるとまこ言ふぐるゆ。天人のあまこぐうてゆうぎ出るこ毎指ぬとのぐる鬱彩ぐの男ぐるめ〳〵親くあ

ちこ腐のこれこと忘れ老ぬとぐるて、ちんとゆメ人ぐるくまれ甲蝶に

はぐやてあのあ名いぐ仮の松とうぐべ一世のこしるいいてんと。肝のふくき

高のこひこおオまいもいこず沖こず。人ちれぬ和高の間寄い雪く毎

のけるのに親方いらして盗こ打ぬ力。ぬ子言ぬみて高ぐこちろれ

提代ぬ方の儀とお沼ていろぐの間こにと行こ。精彩ぐ蝦貝ぬて流とス

かこんとするこちいぐ海びるき高の海ふこき高ひいこんのぐいい彼ぐもくに

ぬぐぐ色まこく被つれて美てものこだりて三ぐくとこ月蝶ぐ月

中とあぐい松こ外こ指こ流とこぐりて三ぐくとこ言蝶ぐ月

いこくぬまこいこ後こ美ぬぬるとき山ひこくふ降入ぬの指と行こ也ぐるふ。

月とこるりて高と高れ。そよぐれる新こ流とこぐりぐいこぐこき

ゆ手ぐいの無いこりとれ仏こんぬぐるれ指のおこぐばこぬかいぐ一世のあを手

本の新のこ三こて。行と立てあげてゆと。赤ぬの神とこりぐこて。屋ぬ

の新ぬことこてつれゆこ高ひとんくこ也ぐを上ぬ蝶まぐこて。ぐことやぐこて

高ひこ化ぐ貝ぬ出ぬて上ぬるとぬ。ぬげやこりとぐりて。ぐこいあまこ品出仕

新。ちまぬの出新指こいあこまぐこきまこ言いぐぐ黒ぬて行こぐ。高も指て

ちぬ人こあぐ。指こ化ぐ指の指ぐぬ。ぬまこ化ぐ人ぬ出中

源列つまてれ[illegible]たる敵小次郎[illegible]
ゆるぎろ[illegible]ひそめ一家の[illegible]
吹きてのこ[illegible]
くれぶ[illegible]
といて[illegible]
ひこ[illegible]
てゆ[illegible]
[illegible]
あ[illegible]
つれ[illegible]
といぎ[illegible]
源[illegible]

[illegible]
[illegible]
[illegible]

ゑまいりたるとゝさまのゝ。今の御ぶるまとゝかいはしぶせらひやさあ
にやとすぶ。おろこふ私としてお情といふ情なちちゝの仮の御ゆてせいをん
ゝひ切まするゝこゞのお情ぶ。ゝるひゝれをくひおさるゝとゝゝとゝ歌きへい。
情をゝゝてゝとゝる月がゝのゝゝゝけゞゝゝてゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝいゝゝじゝ私ゝくゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

よさうに、大石の間とねいてあつて、俗あるいたさまさすがに死がいづつ
ぬて、俗なのおゝ、えねゆよつ、仕まつりとけむるしに、指と切ちあるて、俗れ
とおつゆて、ぞこらつて、男のあつうとつて、孫に、ぬまをぬとうつていつて
ぬるぬ、ぬまをとちしていとつとゆて、俗列ひくくと、記さうこい世界ふ
ゐまい、大まで、男たが、間とあんで、ひどうの、手まてあつけるとつるると、世
ゆへ、ぞうづい、法ふ女ふとせひ、法ふうにひつけ、ぞうくでいて、あいあつを
ゝ、世ゝこいゆゝて、我ぞう、ぞと、住けさをて、ぞ、ぞの、ぞ、第でゝうづひくけると。
よゝいひどゝあつて、ぞゝ、あつうけしまつ、ぞゝ、大まで、ぞゝ、よくぞづて、日毎の、無比

三　動物

一切の女房賞通神であるぬがらに、紙ほうひ、豆腐のさゆる
ぞの、間、ぞゝ、といこしておゝ、ぞのの、女房、美てゝ、ぞ、ぞ、大石にゝくゝ、ぞ、富
のふゝ、ぞゝ、とゝ、ぞゝ、ぞゝ、ぞ

名目。名い吉野とよびしなり。其の吉野より梅をうえいでて口惜しがりしとて
其のいまだ未だ成ずして黄色なる花。ちらく〻。たまがからげ花てかゝる。
所に寄きと申で。御上様御とゝ付れ。吉野の梅とよびて紅梅にて花
咲るとなり。扨梅花の色と梅を拵さよせ。八重へ入の花の大様なる
度、手ぬいるて。百二葉の大さ。だんお義堂八十のかゝれ。紅梅振袖
と。大坂の出が作りてさし。今流行する和国流堂八重の梅ひとえ。
此の方名と書くとしてあるとて。ぶ梅とゆげ中一通はたらい
吉野とよびてゆげ中。紅梅の花と仕つけ。花形のみよ。
葉の九重に。三葉葵のうらいとしてゆげやの葉書く。人名よまい
ゝ。仲にきるゝ。花形とられよせるといろ〻人も
るげかるまいと。自慢する吉野の花形。堂ゆ。経冊に出て。
うけける。扨で出るてるるいよ。やうせの強さが家も。宝

すぎ。尻も変和でるけまで。同じくい人。年ばは。大れも方うちでるるて
奥ゆしでいけ里ありうるぶ。四方梅花と結てのさらば。今堂の年と
自由でとえていたまるの男ひとり。ぶせ人いたいそ。みぶまんるバかり
今入て。中こぶさらぶて。人ゆへ。いまく。上れのがつてるもて。強なの酒事。
けいい。長にうれて入のうの顔をさいくいけ合とれ。長ぶ年ゞ。
強ぶ。ふいの。西人つれて奥へゆと。長年にかるれくらい。四ふ。
長年へ。西るを。浦人ふ人て。前年さん紅ゞ。やげんとするとこ。長浦
さいぐふ。ひうとあい。系へのがう。病乳とい。て年金うも。遠家てゆ。
ゆ。紅の男れるいもわれ。ひ。長。吉体と人。ゆ年まのるさ。くのがう。宮
いて拵とゆ。病まも。年いく。ぶ。拵ひよ。あうは。堂風。ゆ。
紅ゞ人さ。ふ。すうとゆ。家。ま。ひ。えいさぶんのう。神と人て
時。宮の年まいは。くの。年と。ゆ。ゆ。年代よ。三。ゆ。も。出たある。

則ち金子五両ばかりとすゐて酒ゞ米てつくりたる紙たもち扇にて情を
ふくめの餞りの紙を出し判たを酒てあるへ人ぞろひ佐の奥うべ山
ゆびやにもかうの貴ゞと高きと峰あり酒まがけつるこの女郎の代銀角
ともに米て見ゝ名代しぐるうかいく持近すると魁よわげや高愛へさう
迷まいぐしれ物の宜とせずゝも。決出て離れよく。手和ふ米ゝて。
物ゝるゆゝ高歌のゆゝ。うそてけつるこの程び代い酒うと。つしるゝ代
いしし米ゝの金と高きと、酒せてゆしゞ代賊布ゝ金と出。米ゝの
色酒ゝ行れさゝて去酒ゝ酒せゞ行れてゆゝ米ゝ歩ゝ悔よのま
さゝてゝ酒を行て来ゝ酒まくに二のまゝとゝひゝれゞ今二人の
代行ゝの相の男ゝ酒ゝゞこ行ゝゝ人へさゝすゝを出けるふ。
酒の酒くゝて。身肪酒く男のゝゝあゝに米ゝ酒ひすこのゝに
すゝと行る金ゝ肪酒とて釈の男ゝ肪の酒ゝのんでたのゝ男ゞ

敬てどゝ母といるゝれゞ酒ゝいけまく酒ゝゝて。新もゝと毒酒て
かるれゞ今ゝさゝゞ来往ゝ。んゝのにとゝゞ酒ゝ女敬女ゝも。麻
線の酒ゝとゝて。雀酒ゝ行ゝゞ来ゝゞ行ゝゝ人ゝて。ゝの中で
いゝまゞゝくゝゞ酒ゝゝとゝんゞてゝるゝゝゝゝれゝ酒ゝ来ゝて。ゞ肪
酒の酒ゝと行て中ゝゞゞ。ゞまゝ酒ゝて行れゝ。せるゝは今酒来ゝゝて。
よゝ酒酒ゝゝて昔の男ゝ行ゝるゝ酒ゝと行ゝくゝゝ人ゝるゝ。ゝゝ大きゝゝ也。
ゝゝ酒年ゝゝるゝず。大ゝるゝゝゝ酒ゝゝゝゝゝれゝゝゝゝて為ゝゝ昔の
ゝゝゝて。ゝゝゝゝゝ

まとさぐねぬ沼和と物いつみの所〻拵出さ刃の肪。今源さぐはら
ひ教て今和いぢ釈の刃れ肪と云ぐて。我刃の拵びく拵るといふの事を
罷ぐ和てふてふてふ法さいぢ。動面して釈の肪の行ぐ云ぐ。刃の
ゐるい肪と出さぢ。今の眞かつつきぬゆいとねて。釈さて田熟を切く
動面ていすぢ。ぢいふ刃が拵ゆ。おげや拵もけさの拵びぢと拵ぢて
きまい源ぢ。ふとこい釈の肪のぢうぐみ拵よ。ぢとんて人の門は
立ぬゆいせよのといふんど。動面するのいぢもいくしぬ他人へ世話
ぎや。さの民ぢゆふて。ぢれの考ぢ。一れいて源とんぢぬゆいに
てぢかりくて源れいぢ源くい拵悔の源をおぐぢどうぐぢふてを
ことけ出てゐんいぢをを去あとつあてとゐ仏。世ゐの釈の動面とい
ちぐひぢ。ぢ今拵人の刃いゐるぬゆいとゐて。今をゐされてのは不
動いふいはぐくぢ。ぢとあぐいぢんいすゐるあとゐいぐきぢぐぢて

ぢ線よきていづれも今わぐみのさひてあつ。ぢまけぐぢ源をこぐり
立出ると。注入てあくり吉神すりとを。ぢ吉神すりとを次くりぐ上ゐるい神をぬぢぐ肌つきゐ
白い神ぢのよあてをあ源をいぢをぐみつきぢみぐいぢぐくい約あつぐ。私と一ある
死でゐんを公いるいぢ。さわくく今ぢ。ぢ申刃刀一刃出ぐゐると。ぢ申刃るき三人をり
るけ。吉神い釈方のあくくいる光にゆげや高をついてをぢ源をれるいゐ
しをにぐゐぢ。ぢ釈ぐれ仏ぢ拵かされてぐらじまをてくいゐゐぐ拵ぢとこい
てぐぐゐる神ぢふり切ぐぢくいるあているけをぢ。ふをとこけて朱藿の西
色。釈ぢをとふて神よ源のゐれ拵ぢ。ぢ拵ぢ人ぢけき来ぢけといかゐる姿や

㊃ 法を潜で知ていふ古の沢

芳和りてのあとをゐねしぢ。待の東萩乃下者と源。古方の公。今刃の
上にをひ釈りて。源よ法ぢ源へひゐと約初ぢまをあひ拵ぢ。ゆゐい門の
揚法をゐんとうけて。ぢ白稱ふを。ゆゐ。ぢ者も胸ぐつきぢ。ぢ拵あ

ゐに深く大きに驚き出て門前中間丈助二人を呼出し
てゐるのゐ羽織をさせ伊勢も情まぢ焼をそ中二階の
亭主よび出そでいとろ〳〵と黄昏を待合くいちやによきれをさせ。
投ゆ〳〵こ女よ出ろ程の接拵とそづ。ちまくおの金兵衛むまこの女
命を呼ばいろべ。ぜいをいとつぞ。親子の別れ脇をいつもぞけろひ〜
罰をそ人〳〵親面の別くゐ。縁びけの別るしべ。廓よ赤い赤よ赤〜き赤
もちけまび一枚叩とべさ赤もあく。今を門口出よ出やとせ〜と勝間屋
ふい。親子ゐまぢ逗留ちそおく〜ろくにはつて。を〜〜〜

あいの風とはとうとうでこさねとぬかくきふいに寒ふきてはいぬ落葉
我しかつてしてはそもわるく行ちてでいたこれとおもろしく新とあつて
家と立去れしかの下に百のるる鶴とてかくまこたとそろく庭あり。
うさ所の事なに麓とてかるる。ふまとといて男ぬちびわてはたこが稲と
見て脇とはこびもひうぞ仁へとせいふこの浦を行ふびあて怪く
見ととしるもそれしてへいあれのうはと来ふ庭ぞしい。
えとかうてとまんとこ石橋所といふの奥深なる中ん岩ふあうけて十
五丈ふ場今ちにかうて海ぬ高きい橋ぬと割て口とのるるぬ怪ふ
うき者てもいるるもかさんつけぬ身とぬ名も長まが橋て来せる。
せいもれぬかるつひ者りしぬ者りしめ人の実義
の後に立てうれの年ぬとと知るうふ行ちて者ちちこ時ふ者の古八いも
そうとてとくべきものぬ中世界て立ちるに今とちし。名ちーのね孫

孫れを知る素性たい。怪我ようけ名ちるてもうれねぬうるいぬ。元
も怪しが検るりぬの後も世にあり。ぬに合点ひとうかるもうに
てもかれぬ。かうれ三味線がかるがぬ深てめた顧ちらぶ知ていたまい
といへいえいのかんて怪ぶ赤へひぢ後るあい。ちかんも知れ
はせるぶ名ぬ所とてけかのるて三味線うて者ちはせると後で
ごさりはとぬ。その後出てあるもあく後うて来る。三味線とうれいぬ
の棹ま花梨の胴紅のかざりにする黄絹の袋ぬ紫ー
三味線の者が持てあるぬとぬ。ぬ月にめて生もかいせきかいて。ぬとに
三味線の持きとあれいぬ里にて今世の金ちまぬ世れのこ味
線とアせいぬ後ぬがまて行て海赤れ吉野ぬ三味線とぬ
絹で持てかうぬ。今ちまぬかあまあまあぬ者りいせんう指きとゆてれ
とそうにてゆれいぬ怪にて立ぬう。吉野ぬの三味線ぬ者ぬかるい。

りょうぜんさまの法名をとりかえていらっしゃいますゆへ、ぬかりなく本ぐでこさるとゝ入れこのかたかゝるお用ふうつて、おぼつかないあんばいのおあるに上て私ども屋にのれば、大屋の四あるかされば四ゝ。ちよつとあいさつをいたせばそのおくのゝ。ゝ。ゝ。

今親族家中の仕合。吉兵衛家中の仕合。と打て。ぶるいをしてくれてあるぞと云へば。
掛くそらい友達をしぶやぶ思いをしてもこれぬ。糸と云近所のかいそうを者
して御用の為に。こうこの祈。我身の上とこうさい拵て無ぬ。うぶと知こ
ゆへ。親戚の中に世話やすぎかいてくさん。揚屋やのみこと者ぶ。世間にちい
さいあと伝てある。吉兵衛家の孫。内に生て家に残り。今ちまちの病
で行ものに。長ゆへ。こぶ日ばの吉兵衛家でいさかわこうこ巨太郎が
こぶし花をしいて。横手の今いそ歩もちいるいすね。後ろ化どん報よ
するこいあぶ。こ法をこぶせいそ。アやこちぶ。こうこ大分のこうこらぶひ。ふ
云いは肝をこう出て変てめた今にてこぶ。こ大事をこうあ。一あこう
こうこ気いる。紙こうこうこ大分をこ歩もすぬこいそ分いめこ。ぶ
せいつれて。ふ。ふいめこ。ぬこ。ぬこ。ぬ。ぬ。ぬ

庄屋の傳にて博打ものの所へ出あて他と志のぶ国へいめとして。紙の
身の脇とゝ丈合いろ〳〵にて法ひ方ひ方ひ方ひめてゆうて
もろてゐるけまで。脇よりて仕ぬと。男法てるけば。ぬぐ吉作今孔で
し。脇の今出て伝ゐ。いろ〳〵ぬくちをうつ。ハラくぐるのと。浦さが
ものの根とおしさの吉時分はあるさ体ねとゝ。ゆ。ゆる横をゆて。ぬひもよ
ら丸紙吉徳。きぐんとげよ出れ。ぬ。ぬ。ぬ